静岡の道の歴史

国境の城は激戦の地

〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

1400年代後半から戦が各地で起きる戦国時代になります。1560年の桶狭間の戦いで今川義元が敗れて亡くなると、今川氏が治めていた領地は徳川氏と武田氏に分割されたことから、遠江を巡る戦いが起きます。「高天神を制する者は遠江を制す」という言葉があるように、掛川市南部にある高天神城を巡って激しい戦いがありました。

高天神城は遠州灘に近く、東海道からも外れています。それなのになぜ徳川家康や武田勝頼は高天神城を欲しがったのでしょうか。それは駿河と遠江の「国境」の近くにある城で、領地を拡大するために、激しい争奪戦が展開されたからです。武田勝頼にとっては駿河の西の端にあり、諏訪原城（島田市）のある東海道から遠州灘の港につながる道を見張ることができる重要な城でした。一方の徳川家康にとっては遠江の東の端。掛川城と連携して、駿河など東からの攻撃に備える場所でした。つまり複数の交通路が交わる交通の要となる場所だったのです。

長篠の戦いの前の勢力図

高天神城想像図

※掛川市提供のデータを一部加工しました

（監修：近江俊秀・文化庁文化財第二課主任文化財調査官、中村羊一郎・静岡産業大総合研究所客員研究員、本郷和人・東京大史料編纂所教授）

2022年8月14日　静岡新聞「YOMOっと静岡」掲載